

今、なぜ民俗学の歴史離れか

—1970年・80年代の歴史学者から民俗を読む—

西海賢二*

NISHIGAI Kenji

Why Look at the Distance between Folklore Studies and History Today

Evaluating Folklore Studies from Historical Studies in the 1970s and 1980s

It has been some time since people began to argue that folklore studies is in decline. The author might not be alone in thinking that a huge gap is opening between folklore studies and history as an adjacent academic field. In this paper, by looking back at works of and exchange among Tatsuo Hagiwara (Medieval history), Yoshihiko Amino (Medieval history), and Yoshio Yasumaru (Modern history), all historians who were active in the 1970s and 1980s and who positively evaluated folklore studies in Japan, the author provides, in the form of a memoir, insights into the possibility of integrating folklore studies and history, before questioning the integration of folklore studies with sociology, cultural anthropology, and ecology as currently proposed by scholars of folklore studies.

キーワード：歴史学 民俗学 萩原龍夫 網野善彦 安丸良夫

はじめに

民俗学の落日をめぐって、京都の仏教大学を会場にして日本民俗学会の年会で討論がなされてもう10年をむかえる。この間民俗学の潮流として「歴史学」と乖離していったのは傍目でみても明らかであろう。また本年(2008年)は日本民俗学会が立ち上がって60周年ということで、民俗学の今日的課題を問う日本民俗学会の企画として談話会では「さらば「民俗学」—新しい「民俗学」の再構築に向けて—(継続中)」が開催され、同じく2008年4月にスタートした神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センターの公開研究会や同年5月に現代民俗学会が立ち上がったのも記憶に新しい。さらにこの企画や新しい学会立上げに関連した新刊書が上梓され

* 東京家政学院大学人文学部

たことも大いに関連していると思うのは筆者の穿ったみかただろうか。

最近手にしたいいくつかの著作にもこの傾向を明らかに読み取ることができよう。

- (1) 石井正巳『民俗学と現代 批評の宝石たち』三弥井書店 2008年
- (2) 小峰和明他編『歴史と古典』全10冊 吉川弘文館（2008年刊行中＝4冊刊行）
- (3) 山泰幸他編『環境民俗学 新しいフィールド学へ』昭和堂 2008年
- (4) 湯川洋司他編『日本の民俗』全13冊 吉川弘文館（2008年刊行中＝5冊刊行）
- (5) 菅 豊他編『人と動物の日本史』全4巻 吉川弘文館（2008年刊行中＝2冊刊行）

などである。(1)はアカデミズムの枠組みから飛び出、「遠野」「昔話」「柳田國男」をテーマに、現代社会とむきあう民俗学の役割を提言したものである。(2)は「古事記」「万葉集」「源氏物語」「今昔物語」「北野天神縁起」「太平記」「仮名手本忠臣蔵」など時代を超えて輝きを放つ10冊の「古典」を題材にして、その歴史的背景や言葉の意味を理解するもので、その最新刊である『今昔物語集を読む』（2008年12月）所収「生活・民俗史のなかの今昔物語集」（竹村信治稿）では今昔物語集のなかの生活、民俗誌や生活、民俗史のなかの今昔物語集という視点に立った交差する歴史学と文学の延長線上で民俗学の効用を問おうとしている。(3)編者の山泰幸は東アジアをフィールドに民俗文化の保存や活用を通じた地域活性化などに関心をよせつつ、未来志向の民俗学を標榜して自然環境という切り口で、民俗学研究をあらたに展開しようとする試みとして、民俗的認識論、資源所有論、共同体生成論など、環境民俗学の主題を論じようとしている。(4)は「物と人の交流」「村の暮らし」「男と女の民俗誌」など暮らしの中に息づくさまざまな民俗から、激変する現代社会を生きる智恵を導き出そうとしている。(5)はウシ、ウマ、ブタ、ネコ等々、人と動物が織り成す歴史から、日本人の生活、慣習、文化に迫ろうとする試みとして「動物と現代社会」など論じている。

この1年余りの民俗学からの企画には、隣接の学問に身を置いている者でもある種の危機感をバネにした新しい「民俗学」の潮流を読み取ることもでき刺激的である。しかし、歴史学をベースにする者としてはこれらの企画などにこれまでの歴史学との関わり、とくに1970年代、80年代に一時的であったにせよ存在したその融合性はほとんど消滅して、明らかに他の学問との融合性が強調されているように思えてならない。そこで今一度、4半世紀ほど前に歴史学から民俗学に手を差しのべつつ（一面は着かず離れずにうつつていた）本質的に歴史学と民俗学の共有的世界をもとめようとした3人の歴史学者の民俗学へのアプローチへの経緯を時代状況と絡めてさぐってみよう。

文化史学者としての民俗学―萩原龍夫

萩原龍夫（1916～1985年・もと明治大学文学部教授）が亡くなって24年が経過した。一昨年『中世東国武士団と宗教文化』（岩田書院、2007年）が刊行され、著者生前の主著『中世祭祀組織の研究』（吉川弘文館、1962年、増補版1975年）、『神々と村落』（弘文堂、1978年）、『巫女と仏教史』（吉川弘文館、1983年）に未収録だった論文が収録されて、あらためて萩原龍夫のなめらかな中世的宗教世界と民俗学の繋がりに思いをはせた人も多かったのではなかろうか。

萩原先生とは何の縁もなかった一介のもぐりの学生として12年間お世話になったことが走馬灯のように思い起こされるが、それにしても今になっても、調査地を歩き、観察を重ね、聞き書

きをとり、比較し、仮説を構築するというこの研究スタイルは、先生の終生変わらないフィールドワーク(先生と同行した調査先は福島県・埼玉県・千葉県・茨城県・三重県・京都府・神奈川県など)が原点であったことが今更ながら痛感される。

萩原龍夫氏の研究業績について、民俗学研究、日本史研究(中世史・宗教文化史)に携わる者にとっては贅言を要しないであろう。主たる業績には、戦前の肥後和男(1899～1981年)『宮座の研究』(弘文堂、1941年)の影響下、戦後における中世宮座研究の頂点と目されている『中世祭祀組織の研究』(1962年、東京文科大学博士学位論文。1975年増補版)を嚆矢として、寺院、神社、比丘尼、修験道などの宗教勢力と在地勢力との確執、さらにはその狭間で展開されたこれまで等閑にされていた中世村落祭祀の姿を芸能や口承文芸の分野にまで立ち入って徹底したフィールドワークにより紡ぎ出した『神々と村落』(1978年)、晩年に渾身の力を込めた「絵解き」を終生の生業とする熊野比丘尼という女性の民間宗教者の全国における活動をつぶさに調べ上げ、はじめて熊野比丘尼の活動を全国に知らしめた『巫女と仏教史』(1983年)などを挙げることができよう。さらに中世史・近世史、宗教史、文化史、地方史、郷土史(自治体史)などの各分野にまんべんなく業績を残した。かててくわえて前掲の歴史民俗学的な研究とは対照的に『武州文書』(1957年。その後『新編武州古文書』上下。杉山博氏との共編)や『諸州古文書・相州文書抄』(1962年)などに見られるように、萩原氏は関東戦国大名の研究にも業績を挙げていることでも知られている。

萩原氏の発表された論文は、昭和10年代から60年代の初頭までに知られているものだけでも200編以上(2007年刊行の『中世東国武士団と宗教文化』の巻末に掲載されている「萩原龍夫年譜・著作目録」(西垣晴次・佐野和子両氏作成)によれば230編を越えている)を数え、その多くが歴史学と民俗学の谷間に取り残された分野、テーマを意図的に取り組んだものであって、「萩原学」ともいべき学風を形成したものであった。

萩原龍夫氏の平生のゼミや研究集会での口癖(1974年から79年頃か)は歴史学と民俗学の融合性を説く言葉だと当時の私は思い込んでいたようである。それが1980年になって萩原氏が主催していた史料と伝承の会誌表扉に掲げられた宣誓文(広告文)でありかつ「私たちの方針」であると認められている。先鋭であったが萩原氏の「歴史」・「民俗」が交差する指標であったことが伺われる。

- (1) 事実を明らかにするために、私たちは、
史料と伝承とをふたつながら、たいせつ
にする方針である。
- (2) 史料をもて史料を、伝承をもて伝承を
解釈するのは当然である。それとともに、
伝承もて史料もて伝承を解釈することに努める、
というのが私たちの方針である。

1980年7月 史料と伝承の会同人

この宣誓文は、まさにそのまま萩原龍夫氏の研究スタンスが全面にあらわれているのではない。当時日本近世史の社会経済史にどっぷり浸かっていた者としては今更と思いつつも刺激的であったことを鮮明に覚えている。当たり前の史料(文献史学)と当たり前の伝承(民俗学)の両輪が互いに相互関連しつつ、同じ茎で結ばれるように歴史的・文化的・社会的な事柄を浮かび

上がってこさせようとするものであった。

しかし、そうした研究方法に即した「史料と伝承の会」には研究者よりもむしろ在野でインテシブな調査を繰り返している人々の参加（発表者）が多く見られ、かつ萩原氏はこうした人々の調査データを聞き流すことなく、このデータの追跡調査をまさに「史料」と「伝承」の側面からアプローチしており、この調査に機会あるごとに随行させていただいたが、とにもかくにも地域の伝承者や史料所蔵者を分け隔てなく訪ねかつ宿舎などに招き入れ深夜まで語り尽くす姿は、まさに歴史学と民俗学の王道であるかのように思われた。当然酒なども入り、座も盛り上がってくる、もうこうなってくると萩原氏独断場のようでそれは小さな小さな「民俗学ノート（表示されていた）」に要点だけを細かに書き込んでいた。しかし、そうした方法には困難さも付きまっていたことも予想される。

今年（2008年）の日本民俗学会年会の公開シンポジウム「新國学談」再考—先祖・供養・祭り—に明らかのように1947年から49年にかけての柳田國男以来、文献史学と民俗学とは基本的な研究視点、問題意識の相違が歴然としてあり、柳田がそうであったように『歴史学研究』誌上での批判をはじめ文化人類学者からの批判もあり、ある種民俗学の異端性が根幹的にあり、そのような状況下において、史料と伝承を駆使するための方法論的構築などは充分でなかったことを萩原氏は熟知した上で「史料もて史料を、伝承もて伝承を解釈するのは当然である」に行きついたのでと思われる。

そうした状況下においても萩原氏の徹底したフィールドワークによる調査実践と、学会、さらに1950年に立ち上がった地方史研究協議会などとの関連において中央と地方の枠を越えての活動が際立っていた。もう数年前のこと、中部地方のある山間部の村でこんな事に出くわした、80歳すぎの古老から聞き取り調査をしていたところ、「あなたは萩原龍夫さんという人を知っているかね」と質問を受けた。はい教えを受けた旨を伝えると、そうかねもう30年以上も前の事、我家に来て（当時は囲炉裏があったそうである）遅くまで聞き取りをしていったとの事、深夜になり里に下りる交通の便がなくなり、とうとうその囲炉裏の脇で仮眠をとって帰っていったことを懐かしみながら話され、そこだよ今は囲炉裏がなくなったが、あなたがいるそのあたりに萩原さんは横になっていましたとのこと、とにかく萩原氏は全国各地にこうした人々の繋がりをつくり、地域の博物館、資料館、教育委員会関係者との関係を密にとりながら、地域の研究者を育成されていたこと。この基本に「史料と伝承とをふたつながら、たいせつにする」という姿勢を自らが実践をして、このよき場を会して全国各地に萩原ワールドとも言える地域のよき研究者（民俗学理解者）を育成して、それが今日も脈々と伝承されていることに期待したいし、後学の民俗学者は学ぶべきではないだろうか。

中世史家としての民俗学—網野善彦

網野善彦（1928～2004年・もと神奈川大学短期大学部教授）が1978年に平凡社選書の一冊として『無縁・公界・楽—日本中世の自由と平和—』を刊行された当時はまだ戦後歴史学の中なかでも戦前の天皇絶対主義を唱える研究者が少なからず存在していた。そうした状況下で網野氏の記念碑的な本が刊行されたことは当時としてはいまだ時期尚早ではないかという批判もあったようだ。とくに網野氏は本書で遍歴漂泊する職人・芸能民・勸進聖など、中世に生きた「遊手浮

食の輩」と呼ばれた人々に注目したが、この題材すら正面きって歴史学で研究の対象にすることはほとんどなかったといつてよい、あったとしてもそれは歴史学ではながいことタブーとしていた領域であったといつても過言ではない。

歴史学から一線をおいていた宗教学や仏教民俗学、さらには国文学の一部では前掲の人々に対して、それぞれの学問分野において研究はある程度進展していたものの歴史学ではどういふわけかこの種の研究は立ち遅れていた。あったとしてもそれは身分制の範疇で問題とし取捨することが多く、それもこれらの人々を評価の対象におくものではなく、あくまで身分、さらには虐げられた人々が否応なしにその世界に追いやられていったことに終始していたことは事実である。そうした中で網野氏の論説は歴史学を基礎にしつつも隣接の学問を多分に意識しつつとくに民俗学・文化人類学・宗教学などとの結合のなかで歴史の表舞台に登場しないこの無名の人々のとり結ぶ、世俗の人間関係とは「無縁」の関係」として頑なに追究したものである。

しかし、この著書が出たことによって歴史学者のなかにも驚きをもって迎え入れた者も多くいたが、それでもなお、多くの歴史学者のなかには本書の本来的な意図を拒否した面々も少なからずいたことも事実である。そうしたなかで本書が比較的若手の歴史研究者、なかでも歴史学に拘りをもつ者ではなく、学際的な研究のなかで読み込んでいこうとする者が出てきたのがその後、歴史学の1つの潮流になった所以があるだろう。

それは本書が刊行された1970年代後半から社会史研究の進展が並行していたことが幸いしていることは比較的忘れさられている。社会史研究いまや1980年代そして90年代はわが国でもようやくにして本格的にこの研究が主流になりつつあることは言うまでもないであろう。

といつてもヨーロッパを中心にして19世紀後半から起こって歴史学の一大潮流になったような状況には日本の歴史学はなりえない現実があるだろう。とくに1980年代の後半以降この社会史がいまや日本でもブームのように各種の講座ものの類似書が刊行され、なかでも岩波書店なども『社会史研究』と銘打って講座物を刊行しているものの、これが歴史学全体のものとなっていないのが現実であろう。もし、そう思い込んでいる歴史学者がいるとしたらその研究者は本質的に19世紀以降の社会史研究を早計に取り入れたと一人勘違いしているに違いない。

このあたりの問題は歴史民俗資料学を起こそうと、わが国ではじめて大学院に「歴史民俗資料学」の博士課程を網野氏と民俗学者の宮田登氏を中心にして神奈川大学で立ち上げたものの、ここでの成果がもし現れるとしたら21世紀もかなり経過してのことであろうか。いずれにしても網野氏の本書が刊行され一定の評価を得た背後にはこの社会史の動きが連動していたことを見据える必要があることは事実である。

さて、それでは本書で網野氏が「無縁」という言葉を1つのキーワードにして古代社会のアジュールまで溯り、他方では現代の子どもの言葉(ノバチイ・バイキン)や遊び(エンガチヨ)などにも影を落とす、この「無縁」の原理を文献中心に見出したのである。子どもの言葉や遊びを題材にしながらかそれを発展させてその原理を見出そうとする、すなわち中世の一揆・惣・自治都市の規約のうちに、その自覚的表現を見出すことが可能であるとしたのである。

さらに「無主」「無縁」の原理を担った人々をそれまでの身分制の範疇で片付けることを非難し、むしろこれらの人々を正統な歴史を動かしてきた集団として把握することに全力を傾けている。この問題たとえばヨーロッパ社会のなかで粉引き職人を仮に題材とした時に19世紀中ごろであればやはり研究の対象にはしにくかった(阿部謹也の『ハーメルンの笛吹き男』をはじめと

する一連の著作など）ものを歴史の舞台に登場させること、すなわちこれらの人々を真に歴史を動かしてきた弱者の力であるという著者の主張となってあらわれている。

当然のことながら前掲の職人問題も職人を単なる「職人」として把握することに主眼があったそれまでの歴史学が職人を職能者としてみていくことによって、職人がある時には職人を超えてある種の宗教的世界にも関わっていたことを網野氏はその後『日本中世の民衆像』（岩波書店、1980年）、『職人歌合』（岩波書店、1992年）などによって提示してくれたであろう。こうした評価をしつつ現在の歴史学者や民俗学者たちはどの程度この網野氏の仕事を見、かつ継承しているだろうか。このあたりのことを理解しないままに網野氏の仕事を見ていくとこれからの歴史学者や民俗学者は本来的に社会史研究を普遍化することはできないであろう。

以下、このあたりのことを視野におきつつ網野氏が意図していた「歴史民俗資料学」について少し考えてみよう。「歴史民俗資料学」という言葉もいまだに市民権を得たものとは思われていない、またこれからも10年のスパンで展望しても、今の歴史学のなかでは主流にはならないだろうし、歴史学の1分野として正直のところ一部物好き集団の輩に見られるのが現実ではなからうか、これととももうすでにこの動向について一部の歴史学者が非難をはじめているのをも歴然としている。

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科で刊行している『歴史民俗資料学研究』（現在13号まで刊行中）によせられた論文構成をみると網野・宮田両氏が意図した歴史民俗資料学の構想は効率よく展開しているのだろうか。例えば第2号と13号には10数本の論文や研究ノートが寄せられている。

2号（1997.2）

田上繁「個人所蔵者における古文書保存の現状と課題」

富沢達三「幕末風刺画と鯨絵」

佐々木茂「足利成氏文書と不改年号」

森田真也「台湾における「原住民」観光」

樫村賢二「「愚か村」とされた村」

清水邦彦「銭洗水から銭洗弁天へ」

北村肇「技術を伝承すること」

赤野あゆみ「民俗資料のデータベース化に関する一考察」

マイケル・フォスター「近代における河童の変容」

ビュデル・ジャン・ミッシェル「日本のオモチャ」

13号（2008.3）

小林公子「道修町と神農祭」

齋藤研也「横浜専門学校における報国団と報国隊」

坂井美香「柳田國男、『新國学談』のころ」

高野宏康「雄弁家としての永井柳太郎」

内藤大海「王禎『農書』唐箕絵図の解説」

山田ノリ子「第二次世界大戦後の中国における日赤従軍看護婦」

今井功一「建築史学と博物館」

及川晃一「木造船の水漏れを防ぐ技術」

對馬陽一郎「都城における木刀生産業の成立過程について」

などである。一読してたしかに民俗学・歴史学・古文書学・文化人類学・口承文芸・民具学・比較文化学・政治学・観光学・妖怪学・玩具学(童具学)博物館学・建築学などと研究の方法はきわめて学際的である。

しかし、内容になると網野氏・宮田氏らが主張してきた歴史民俗資料学の方法や分野に関わるものは少ないし、分析方法にいたってはほとんどが学際的というより民俗学、あるいは歴史学の範疇による論文となっているようだ。この問題は網野氏の『無縁・公界・楽—日本中世の自由と平和』が刊行後に経済史を基礎にしつつもその太閤検地論争で1960年代の歴史学界で華々しく活躍した安楽城盛昭氏の『天皇・天皇制・百姓・沖縄』で厳しい批判があったことと連動しているようだ。いうなれば1980年代に歴史学と民俗学の結婚ということが叫ばれて久しいもののやはり本質的には柳田國男以来の歴史学と民俗学が相携えての研究方向は確立していないようだ。確立するどころか歴史学の最近のとくに中世史・近世史の動向においてもますます歴史学と民俗学は乖離したものになっているのではないか。

1つの古文書を読んでも歴史学の解釈と民俗学の解釈では大きく異なることを歴史学は認めつつも本質的には古文書の世界を踏襲している点は理解に苦しむところである。

例えば近年の「偽文書」をめぐるなかで網野氏や石井進氏によってはやくから言われていたことだが中世の職人集団がどうして同じような巻物を持参して全国を徘徊したのか。とくに「連尺」の巻物を特定の修験者らが持ち歩き「市立て」の権限をもっていたことが次第に解明されつつある。しかし、この修験者でもどのような修験者(天台系・真言系・出羽系など)の系統が持ち歩いていたのか等はほとんど省みられることがない。とくに関東から東北地方になぜ特定の巻物が残っているのか歴史学、民俗学、歴史地理学あたりが相互にいい意味での牽制しあうことによつてこそ「偽文書」のもつ有効性が出てくるのではなからうか。もうそろそろ口実だけの学問の融合性から解き放たれて本当の学際的な研究になっていく時代ではなからうか、その意味では賛否両論があるにせよ網野氏の従来の日本史像の一面性を拒否するとともに、人類共同体の在り方について、すぐれて普遍的な問題を4半世紀前に提起した『無縁・公界・楽—日本中世の自由と平和』はきわめて刺激的な書物であったことだけは認めざるを得ないし、他の学問との融合を計ろうとしている民俗学者が今一度読み解きつつ、彼の主張した「歴史民俗資料学」が展開することを願望している。2000年2月、同じく歴史民俗資料学を構築しようとした宮田登氏が黄泉の国に旅立った。その年末、私は某出版社から網野氏の「中世の漂泊民」と「近世の漂泊民」のジョイントした「中近世の漂泊民—歴史学・民俗学(対談集)」の企画(3~4巻)をいただいたが個人的な能力の問題、かつ宮田先生の喪中期間はとともその気なれず即答を控えていた、その後1年もしないうちに網野氏が病に倒れられ企画は止む無く中断することとなった。今となっては残念でならない。

歴史民俗資料学を標榜するなら網野氏の薫陶を受けて自分を試させていただく機会をもち、少しでも歴史学と民俗学の繋がりをもつべきだったと自戒している。

そうしたおり歴史学と民俗学の今後を見る上でも、網野氏、宮田氏が種をまいた神奈川大学日本常民文化研究所(佐野賢治所長)に非文字資料研究センター(福田アジオセンター長)が発足されたことは大変喜ばしいことである。

非文字資料研究センターは、文部科学省が世界的研究拠点形成のために行なった21世紀COE

プログラムに採択された「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の研究事業を継承・発展させる組織として、2008年4月に神奈川大学日本常民文化研究所の付置機関として発足した。本センターは、非文字資料全体の体系化目的とした基幹共同課題（(1) 非文字資料研究ネットワーク形成研究、(2) 地域統合情報発信の開発）およびCOEの研究蓄積を基盤とした新たな共同研究課題（(3) 『マルチ言語版絵巻による日本常民生活絵引』の編纂共同研究、(4) 関東大震災後の都市復興過程とそのデータベース化、並びに資料収集、(5) 中国・韓国の旧日本租界、(6) 持続と変容の実態の研究）を設定して研究を行い、その研究成果を公開研究会の開催などをおして発信していく機関であるという。先日その公開研究会に参加する機会にめぐまれ、大変な刺激をうけた。非文字資料研究センターといいながら根幹というか大前提に文字資料提示の上に立脚した「非文字」の重要性が提示されているという姿勢に学ぶとともに網野氏らによって撒かれた種が発芽して民俗学と歴史学の当たり前の共存が展開するのではと大いに期待をよせている。

近代思想史（民衆思想）家としての民俗学—安丸良夫

安丸良夫（1934年～ ・もと一橋大学社会学部教授）は、1960年代以降に盛んになった民衆思想史研究家の第一人者として著名である。2007年7月に発行された著作『文明化の経験—近代転換期の日本—』（岩波書店）は、氏の1980年代に発表された論考を中心としているが、書下ろしの序論と現代の問題状況を考察した補論を付加して、既出の論文に新たな意味を付与し、現段階の「近代転換期の日本」の再解釈と歴史学と民俗学？など隣接学問を視野においた総体的な理解を試みた問題提起の書となっている。

安丸良夫氏と知己を得たのは、1984年拙著『近世遊行聖の研究』（三一書房）を刊行したことに溯る。歴史学と民俗学の谷間で悶々としていた頃にまとめた近世の民間宗教者徳本上人・木食観正らの講集団を媒介とした地域活動が、安丸氏の民衆思想の展開と直接の関与は見出されなかったが、そうした方向性もあることの可能性を評価していただき、今日に至っている。

さて、安丸氏の仕事に影響されたのは、やはり『日本の近代化と民衆思想』（青木書店、1974年・平凡社（平凡社ライブラリー）、1999年）との出会いであったことは明らかである。当時、近世の社会経済史を専攻する学部生であったが、生意気にも自分なりに書評（書誌紹介）めいたものを認めたことがあった。

1868年の明治新政府とともに、264年にわたる江戸幕府の封建的支配体制は、ここに終末し、日本は近代的国家の一步を踏み出したのである。しかし、明治維新という斬新な言葉の中に描写される近代日本の萌芽は、すでに、それよりかなり以前に散見するところであり、これを行動に至らしめたものに、民衆の封建体制に対する抵抗運動（安丸氏のいう通俗道徳をつきつめる）が存していたことを忘れてはなるまい。

ここでいう民衆の抵抗運動とは、いうまでもなく農民を中心とした幕末期に頂点に達する一揆運動、さらには農民や下層（日雇雇用）町人による打ちこわしなどの世直し運動が、やがては民衆宗教を媒介とした日本の近代化を前進させる世直しの新宗教運動にも連繋しているのである。

近代化する過程において、士農工商という身分的には制約を受けつつも、生活的には比較的恵まれた町人層に対して、農民は身分的にも生活的にも重圧の苦しみの中で喘いでいた。その農民側から幕藩体制という封建的支配体制に対する反抗の一揆が頻出したのも、当然の結果であった。

そうした状況を把握するために主として幕末から近代にかけての民衆意識の変革と、民衆の宗教意識の展開に即して、日本の近代化を試みた一書である。

本書の内容は、近世中後期からの民衆思想の基本的な動向を「通俗道徳」という日常時における生活規範が、民衆の思想形成の上で果たした役割について論究した第一篇「民衆思想の展開」と通俗道徳を一般民衆が実施したであろう裏面と、近世中後期以降に展開する百姓一揆の思想史的基盤・構造・あるいは思想史の意味を提示した第二篇「民衆闘争の思想」の二部構成からなっている。第一篇では第一章「日本の近代化と民衆思想」、第二章「民衆道徳とイデオロギー編成」第三章『『世直し』の論理の系譜—丸山教を中心に—』に、第二篇では第四章「民衆蜂起の世界像—百姓一揆の思想史の意味その1—」、第五章「民衆蜂起の意識過程—百姓一揆の思想史の意味その2—」からなっている。

第一章は、元禄・享保期を1つの画期として、近世中後期に全国的規模で民衆的思想が展開したことを指摘するとともに、その展開過程に1つの共通項を抽出した。それを安丸氏は「通俗道徳」として位置づける。さらに、通俗道徳が近世中期以降における幕藩体制を強化させる一方、安定化させるカンフル剤的要素を内包していたことを強調される。しかし、その反面「通俗道徳諸徳目」の実践させる過程には、地域差、時間差、階級差の3者を超越した広範な下層町人・民衆などの執拗なまでの自己形成が何度となく繰り返せされ、そのことによって自己形成を1つの媒介項として日本近代化の原動力が育成されていったことを、幕末から維新时期という歴史の変遷過程の中で、高く評価すべきであることを論証している。

第二章は、一章で提示した「通俗道徳」の実践を近世後期の農村荒廃化現象の中で位置づけ、これを模倣することによって明治初年における新政府の主張する「期待される通俗道徳の実践村」の出現をみ、その引導約を新政府が実践、すなわち宣伝することによって通俗道徳が普遍化する過程を論じている。加えて、この普遍化する通俗道徳が明治新政府の地盤を確固たるものとし、近代日本を形成する上で思想的にも不動的な地位を得ていたことを論じ、その一方、裏面として民衆などの実践する通俗道徳が、民衆内部の思想構造に停滞するだけでなく、新政府（為政者）に対する痛烈な批判を含蓄しつつあったことを提示するとともに分析している。

しかしながら、安丸氏は民衆による支配者階級に対する痛烈な批判も、その実、布川清司氏や宮城公子氏などが指摘される「通俗道徳をつきやぶる」、即ち社会体制を根底から変革させようとする行動（展望）まで、展開させることには多少疑問がありとし、それより世界的視野に立脚するならば、変革を描写しようとする場合、本来、宗教と世直し観念の連繋がクローズアップされるのだが、わが国の近世後期から近代移行期における宗教にはそれが稀薄だったとし、幕末期にとくに顕著にみられる百姓一揆や打ちこわしは非宗教的性格が強く、これが農民闘争としての飛躍に欠如をもたらしたのであろうとする見解は注目すべき提示であろう。

第三章では、二章の後半部分を展開させて、とりわけ「世直し観念」を民衆がいかに構築・発展させていったかを論じるとともに、「世直し観念」が日本の近代化社会への一形態であるとし、翻ってそれは安丸氏とほぼ同世代の民俗学者宮田登（1936～2000年）氏の『ミロク信仰の研究—日本における伝統的メシア観』（未来社、1970年）に代表されるように、民衆の伝統のなかで培われてきた宗教意識としてのミロク信仰などに根ざしたものであり、さらに「世直し観念」という一形態が通俗道徳を実践する過程において基盤でありメリットでもあることを指摘している。

安丸氏はこの「世直し観念」と民衆の宗教意識との関連性を、幕末の民衆宗教の1つである丸山教にその素材をもとめ、開祖伊藤六郎兵衛の思想を分析することによって、世直し観念と民衆宗教の特質と思想形成を評価している。

第四章は、第一篇における「通俗道徳」論を確認しつつ、百姓一揆との問題に視点を据えている。そこで百姓一揆という行為（決起）が幕藩体制というレジームに、諸要求を強要するものであり幕府（為政者）と民衆との秩序原理が不安定な現象であるとする。さらに、その百姓一揆という行動の中には、通俗道徳を超越するような思想形成は稀薄であるが、民衆の日常時における非日常的形態としての一揆という行為が含蓄されたものであり、日常時の中にも一揆に参加することによって自己育成と自己解放が存し、百姓一揆が日常という対比関係の中で高揚しつつあったことに注目している。

また、一揆の持続する要因には、日常時における民衆の1つの目標に対する組織体が百姓一揆という行為となって爆発しないまま消滅してしまったものが多いことを論究し、小括としてその百姓一揆が爆発する過程において日常時における幕藩体制外の世界像、すなわち近代的思想形成が一揆と連携をもちながら、農民のうちでも豪農とよばれて幕末においては一般民衆の一揆の矛先となるが多かった人々にあったことを指摘している。

第五章では幕藩体制と一揆との関係を詳細に論じる。例えば一揆は「村」という単位の中で準備が着々と進み、その一揆を指導する人物の特徴づけを村の有する公的価値と、正統性の主張が数ヶ村という連合体としての一揆首謀者となることを指摘する。さらに、この一揆の首謀者が数ヶ村の連合体を組織しようとするとき、その村々との連体関係（結合関係）や利用、非利用関係は決して同義的性格を有することはないという主張を多彩なデータ駆使して論じている。

また、一揆鎮圧や通俗道徳をして日本の近代化政策が一応の成功をみたのは、明治という社会的規制が確立したことを意味し、一揆という形態、すなわち闘争のなかで崩芽してきた様々な民衆の可能意識が民衆自身の世界においては抑圧される結果を生じ、幕末維新时期における近代化への道は狭く不確かな道としてしか残存を余儀なくされたと括っている。

門外漢の者が書評めいたものを紹介したために本書の誤読をした可能性があることは承知している。本書をめぐっては第一篇所収の論文が公にされて以来、布川清司氏や宮城公子氏との論争にまで発展したように、日本の近代化と民衆思想を考慮しようとするとき多くの学恩を得ているのは評者1人ではないであろう。本書が今後の民衆思想史研究に厚味を加えるとともに、後学に与える影響は少なからぬものがあると思われる。30数年前にメモとして認めたものであり、今日の民衆思想史研究の進展からすると時代遅れになるかもしれない思いながらも、歴史学と民俗学との狭間で迷走していた時に受けた刺激を近年の民俗学を標榜する方々にも今一度再確認して頂きたい思いから紹介したものである。

さて、安丸氏の『日本の近代化と民衆思想』刊行から33年、『文明化の経験—近代転換期の日本—』が刊行される経緯のなかで、安丸氏（一部網野氏を含む）は民俗学との繋がりをどのようなスタンスで考えていたのかを近著の内容から読み解いておきたい。

網野氏、安丸氏が直接「民俗学」との繋がりを深めた経緯について記した著書・論文については筆者の能力不足から確認をしていない。あくまで2人との日常会話のなかでどうやら1980年代の初頭に1つのエピソードがあったことだけは確認することができた。それが安丸氏は1980年のカリフォルニア大学バークレー校にての研修、網野氏も同じく1980年代初頭南米ペルーを調

査旅行する過程において、ともに海外経験を1つのきっかけにして日本文化を見据えることによって、新たな日本文化論が再構築できる可能性を発見したらしいことは確認できるがその間の経緯については詳らかではない。そこで安丸氏の研究経緯をその著作から概観しながら民俗学的世界との繋がりを考える糸口にしたい。

以下、安丸氏の著書・論文・書評・批評(出版企画への参画などを含む)の一部を列挙すると

著書(年代)

著書(年代)	所収論文年代
① 1974年 『日本の近代化と民衆思想』(青木書店)	(1965～1974)
② 1977年 『出口なお』(朝日新聞社)	(1973～1976)
③ 1977年 『日本ナショナルリズムの前夜』(朝日新聞社)	(1968～1976)
④ 1979年 『神々の明治維新—神仏分離と廃仏毀釈—』(岩波書店)	(1979)
⑤ 1992年 『近代天皇像の形成』(岩波書店)	(1992)
⑥ 1996年 『〈方法〉としての思想史』(校倉書房)	(1962～1994)
⑦ 1999年 『一揆・監獄・コスモロジー—周縁性の歴史学—』(朝日新聞社)	(1987～1995)
⑧ 2004年 『現代日本思想論—歴史意識とイデオロギー—』(岩波書店)	(1995～2002)
⑨ 2007年 『文明化の経験—近代転換期の日本—』	(本文 1983～1992) (補論 1996～2006)

論文・年代(民俗的な関わりが見出せるもののみ)

- ① 1965年 「日本の近代化と民衆思想」『日本史研究』78・79
- ② 1973年 「民衆蜂起の世界像」『思想』586
- ③ 1980年 「前近代の民衆像」『歴史評論』363
- ④ 1985年 「俳仏論から国体神学へ」『仏教史学』28(1)
- ⑤ 1986年 「近代化」の思想と民俗、『一風土と文化—日本列島の位相』(日本民俗文化大系1)、小学館
- ⑥ 1986年 「総論—歴史のなかでの葛藤と模索」、『近代と伝統—近世仏教の変質と転換』(大系 仏教と日本人11)、春秋社
- ⑦ 1988年 「近代転換期における宗教と国家」、『宗教と国家』(日本近代思想大系5)、岩波書店
- ⑧ 1989年 「文化の場としての民俗」『歴史学研究』589

書評・批評(他)年代

- ① 1975年 「柳田学と民衆運動」、『読売新聞』(7月16日)
- ② 1978年 「不安の伝播」、『日本民俗文化大系1 色川大吉『柳田國男』』月報、講談社
- ③ 1985年 「神仏分離と京都」、『京の社(やしろ)神々と祭り』人文書院

著書、論文、書評、批評、参画の刊行経緯がそのまま、民俗学的世界へのアプローチへ直結しているとするのは早計である事は承知した上で著書に関わっては④・⑥・⑨、論文では③・④・⑤・⑥・⑧、書評(他)では②に比較的民俗学的記述が散見していることが判明する。さらに前掲した網野氏・宮田氏との繋がりからすれば1983年から86年にかけて企画編集された小学館の『日本民俗文化大系』(全12巻)に参画したことが人的交流もふくめて安丸氏、網野氏ともにある種の民俗的世界への視点が拡大したことは歴然としており、さらにそのきっかけになるのがアメリカやペルーで察知した日本文化の深層ということになるだろうか。1970年代・80年代に絞って3人の歴史学者から民俗学へのアプローチがあったことの一部を紹介してきたが、実はこの3

今、なぜ民俗学の歴史離れか（西海）

人と並行して民俗学者からの歴史学へのアプローチをされ、この間の民俗学を引導してきた宮田登氏、福田アジオ氏（1941年～）の仕事との結びつきを目論んでいたが紙幅の関係と何よりも筆者の能力不足から論ぜられなかったことを深くお詫びする次第である。